

2025年11月23日（降臨節前主日・特定29、C年）

メッセージ

「十字架に即位する王」

（ルカによる福音書23:33-43）

司祭ヨセフ太田信三

今日は教会暦の最後の主日です。この主日は「王なるキリストの主日」と言われます。「王なるキリスト」の主日は、1925年にローマ・カトリックにて定められたものです。1925年はヒトラー、ムッソリーニ、スターリンが独裁体制を固めていった時代です。そのような世の動きの中で、キリストこそがまことの王なのだ、と望み、今が世の終わりのように思えるかもしれないけれど、王であるキリストが再び来てくださる喜びの時こそが終わりの時なのだ、と祝ったのです。今日の福音はまさに、まことの王、王なるキリストの姿が示されています。

三つの十字架の真ん中は主イエス、両脇はいずれも死刑囚です。片方の囚人は「自分と我々を救ってみろ」とののしりつつも、救いを懇願します。しかし、十字架から降りられない男がメシアであるとは信じられず、結局はあざ笑い、冒涇します。

さて、もう片側の囚人は、「あなたの御国へ行かれるときには、わたしを思い出してください」と、言うなれば十字架上のイエスに信仰告白します。

人々にしてみれば、無力にも十字架から降りてこないことこそ、イエスがメシアでも、ユダヤ人の王でもないことの証しに他なりません。しかしイエスは、十字架から降りないのです。なぜなら、王なるキリストは十字架に即位したからです。玉座ではなく、十字架に即位するとは、この世界でもっとも悲惨で、救いようのない現実を生きる人と共におられる王となるためでした。最低最悪の罪を犯した人間であっても、イエスは同じ罪人となり、その命を樂園へと招きます。すべての人の幸いを心底願い、もっとも苦しい人間をこそ、自らの命を差し出してまでも救うのが、王なるキリストです。これこそがまことの王なのです。

私たちは、十字架上のイエスをどのように見つめているのでしょうか。十字架から降りられないイエスを笑うのか。それとも、十字架から降りないからこそイエスはメシアであると信じるのか。わたしたちは、どう十字架を見つめているのでしょうか。

十字架上のイエスは、「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか分からないのです。」と祈りました。これは、私たちのための祈りに他ならないと感じます。分からぬうちに、神から、イエスから、愛から離れてしまう私たちです。しかし、このイエスの祈りによって自らの十字架への眼差しを省みつつ、あらためて「王なるキリスト」を崇め、新しい暦へと歩み出したいと願います。そして備えの時である降臨節、心耕され、まことの王のご降誕を心から喜ぶことができますように。